



営農NEWS



来年のイネ縞葉枯病対策として、本田の耕起、畦畔の除草を徹底し、育苗箱施薬の準備をしましょう

県病害虫防除所では、本年 9～10 月に水田内のヒコバエ（再生稲）でのイネ縞葉枯病発生調査を行い、県全体における発病株率が 9.4%と昨年と同様に高く、平成 20 年と比較して約 9 倍に増加していること、また、県西地域の平均発病株率が 26.0%と高く、更に県南地域の平均発病株率も 6.4%と昨年より約 3 倍に増加していることから

病害虫速報No.9 「県内全域のヒコバエ（再生稲）にイネ縞葉枯病が発生しています。」

来年の本田での発病を防ぐため、速やかに収穫後の耕起を行い、畦畔の除草を徹底し、育苗箱施薬の準備をしましょう（平成 26 年 11 月 14 日付）を発表しています。

県西、県南地域など、既に発病している水田や、周辺に発病水田がある地域を中心として、下記を参考に、縞葉枯病の防除対策を必ず実施してください。

1 縞葉枯病とは

本病は、ヒメトビウンカが媒介するウイルス病で、昭和 50 年代には多くの水田で発生が見られた病害でしたが、平成に入ってから発生が激減し、ほとんど確認されませんでした。しかし、平成 20 年頃より、再び県内でも発生が確認され、徐々に発病面積が拡大しています。

本病の病徴は、田植後の分けつ期に感染、発病すると、新葉が展開せずに「こより状」に垂れ下がる（いわゆるユウレイ症状）となり次第に枯れます。また、幼穂形成期以降に感染した場合には、出すくみや奇形穂となって稔実不良や不稔になります。なお、感染した株では、イネ刈取り後のヒコバエ（再生稲）で明瞭な病徴が表れますが、これもヒメトビウンカの保毒源になります。

伝染環として、ウイルスを保毒したヒメトビウンカ老熟幼虫が水田周辺の雑草等で越冬し、4 月上旬頃より麦畑に移動して増殖します。その後、6 月上旬頃から水田に飛来してイネにウイルスを感染させます。ウイルスは卵を通して次世代の虫にまで移りますので、麦畑で一代経過して増殖し、数を増した保毒虫がイネに飛来、感染させるため、保毒虫率が高いと縞葉枯病の発生が多くなる傾向があります。

2 防除対策

- 1) 本田での発病株は抜き取り、ヒコバエ（再生稲）を秋の早めに耕起して土中にすき込むなど、伝染源を除去することが重要です。
- 2) 冬季におけるヒメトビウンカ越冬場所の水田周辺畦畔を、常に除草して、生息密度を低下させます。
- 3) 田植前に、媒介虫ヒメトビウンカを対象に、育苗箱（薬効が長期持続する）殺虫剤を施用しましょう。
- 4) 麦畑から飛来するヒメトビウンカ成虫を対象に、本田防除（6 月上旬～中旬頃）を実施しましょう。
- 5) 本田での発生が多い場合は、3) や 4) の実施に関わらず、更に、6 月下旬～7 月上旬の追加防除を行います。
- 6) 縞葉枯病の抵抗性品種として、主食用米では「一番星」、「あさひの夢」、飼料用稲では「夢あおば」、「ホシアオバ」、「クサホナミ」等があります。

表 1 ヒメトビウンカ（ウンカ類）防除の主な水稻育苗箱施薬剤（平成 26 年 11 月 17 日現在）

| 薬 剤 名 | | 使 用 時 期／使 用 回 数 | 箱 当 たり 使 用 量 |
|-----------|--------------------|-------------------|--------------|
| 殺 虫 剤 | ダントツ箱粒剤 | 移植 3 日前～移植当日／1 回 | 5 0 g |
| | アドマイヤー CR 箱粒剤 | 播種時（覆土前）～移植当日／1 回 | 5 0 g |
| | スターダム箱粒剤 | 移植 3 日前～移植当日／1 回 | 5 0 g |
| 殺 虫 殺 菌 剤 | スタウトダントツ箱粒剤 | 播種時（覆土前）～移植当日／1 回 | 5 0 g |
| | デジタルコラトップアクタラ箱粒剤 | 移植前 3 日～移植当日／1 回 | 5 0 g |
| | ダントツオリゼメート 1 0 箱粒剤 | 移植 3 日前～移植当日／1 回 | 5 0 g |

※ 縞葉枯病以外に、いもち病の常発地では、殺虫殺菌剤が有効になります。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040